

北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 49号

2003年4月～2003年6月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

ROCK AND VALLEY 2003春 No49



室堂にて全員集合 Photo by KIMURA

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

ACC-J茨城の歩み

ACC-J茨城がACC-J茨城支部として創立してから今年で30年を迎える事が出来ました。この節目の年にACC-J茨城の歩みを振り返って見たいと思います。

東京仙岳会から退会した水島氏、神田氏、谷川氏が中心になり14名でACC-Jを発足したのが1962年（昭和37年）。会の名称はオーソドックスな中に前衛的な登山を目指すのに相応しく『アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン』と命名したと先輩から教わりました。クラブの目標が夏の岩登りだけでなく、冬の岩壁登攀を目標として発足した精神はその後脈々と受け継がれ、当時としては1泊2日が常識であった冬の八ヶ岳赤岳西壁、横岳西壁への夜行日帰り山行が当たり前になり、更には北岳バットレスや甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁への夜行日帰り山行へと発展していきました。国内の岩壁で技術を磨いた会員は必然的にヨーロッパアルプスへと足を伸ばし、マッターホルン北壁、アイガー北壁、グランドジョラス北壁、ドリュー北壁、ピッツバディレ北壁、クルト北壁、ドロワット北壁等の主要北壁の登攀に成功しました。冬期においてもグランドジョラス北壁中央クロワール、ドロワット北壁クジールートの初登攀に成功して足跡を残しています。国内においても明星山P6南壁に本図氏が中心になりACC-Jルートを開拓するなど前衛的な登攀中心の山行が実践されていった時代でした。

その後、茨城に帰った本図氏がACC-J茨城支部創立を呼びかけ、創立会員として木村他2名が参加したのが1973年（昭和48年）8月でした。

茨城支部の会員同士で冬の岩壁登攀

を目標に、毎週々山行を重ね夏は谷川岳一ノ倉沢の登攀。冬は八ヶ岳西壁の登攀で登攀技術を磨き、厳冬期北穂滝谷の登攀や厳冬期一ノ倉沢の登攀が出来るようになるまで成長しました。そうなるとう当然海外の山にも目が向き、1976年（昭和51年）にヒンズーラジのブラッツヨース（6,191m）に本図氏が隊長になりACC-J合同隊として木村、杉山、金、阿部の5名が意欲を持って遠征しました。しかし、ベースキャンプが土石流に流されるアクシデントに遭い装備と日数不足の為に敗退しましたが、ブラッツヨース（6,191m）は圧倒的な岩壁に囲まれ未だその頂きを踏んだ者はいません。

また、東京の露草登高会、アスペンクラブ、ACC-Jの3団体が三木会を組織して遭難救助の互助として協力しあった時期もありました。

その後、ACC-J茨城支部から発展してACC-J茨城として茨城岳連に加盟し、オールラウンドな登山を實踐して現在にいたっております。

同じ釜の飯を食べ、お互いに命を助け合った仲間同士でザイルを結び30年が経過しました。その間、数々のアクシデントがありましたが、幸いにも今日まで死者を出さなかった事は幸運であります。

今後もACC-J茨城が存続する限り、会員の技術力の向上を図り遭難防止に努力し、山に学んで行きたいと思っています。

木村 一

《目 次》

2003年 夏号 4月～6月 ACC-J 茨城

巻頭言	(木村) 1
目次	 2
集会報告	 3
山行報告	 4
巻機山スキー	(木南) 5
知床岳～ルシャ山	(笹平) 6～7
羅白岳山スキー	(笹平) 8～10
剣岳八ツ峰	(渡辺) 11～12
黒岩 聖人岩フリークライミング	(木南) 12
真砂谷山スキー	(笹平) 13
立山 丸山中央山稜	(笹平) 14
竜王岳東尾根	(本図) 15～16
剣沢～雷鳥沢山スキー	(江平) 16～17
立山 雄山	(菊地) 18
立山タンボ沢山スキー	(江平) 19～20
尾瀬燧ヶ岳山スキー	(木村) 21
御岩山岩トレ	(坂田) 22
谷川岳芝倉沢山スキー	(渡辺) 23
針ノ木岳大雪溪山スキー	(渡辺) 24
清津川サゴイ沢	(名雪) 25～26
谷川岳一ノ倉沢中央カンテ	(吉田) 27～28
那須白水沢左俣	(鈴木) 29
会津硫黄沢	(坂田) 30～31
奥多摩鷹ノ巣谷	(木村) 32
安達太良湯川	(菊地) 33
三ツ峠岩トレ	(鈴木) 34
友好山岳団体の月報・会報・その他	
編集後記	(木村) 39

表紙 北ア剣岳八ツ峰のナイフリッジを登る渡辺、名雪 Photo by SASAHIRA

集会報告

[於 土浦 Gusto]

.....[4月]

4月2日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、鈴木、坂田、木南

4月16日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、鈴木、坂田、木南

4月30日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、鈴木、坂田、木南、鯉河

.....[5月]

5月14日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、鈴木、坂田、木南、須賀

5月28日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、鈴木、坂田、木南、須賀

.....[6月]

6月11日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、坂田、鈴木

6月25日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、坂田、須賀



山行報告

《 2003年4月～2003年6月 》

.....[4 月]

4月 1日～4月 2日	知床岳	L笹平
4月 6日	巻機山	L木村、吉田、渡辺、木南、名雪、松原
4月10日	羅臼岳	L笹平
4月13日	御岩山岩トレ	L本図、木村、菊地、吉田、渡辺、木南、鈴木、須賀
4月20日	三岩岳	L木村、笹平、吉田、名雪
4月27日～4月29日	剣岳ハツ峰	L笹平、渡辺、名雪
4月27日	黒岩フリー	L吉田、鈴木、木南

.....[5 月]

5月 1日	真砂谷山スキー	L笹平
5月 2日	立山丸山中央山稜	L笹平
5月 4日	竜王岳東尾根	L本図、渡辺、松原
5月 4日	剣沢～雷鳥沢山スキー	L木村、笹平、吉田、木南、江平、佐藤
5月 4日	雄山	L中島、菊地、金沢
5月 5日	タンボ沢山スキー	L木村、笹平、吉田、渡辺、木南、中島、江平
5月11日	燧ヶ岳 沢山スキー	L木村、吉田、木南
5月11日	御岩山岩トレ	L笹平、坂田、須賀、本図
5月18日	谷川岳芝倉沢山スキー	L木村、吉田、渡辺
5月25日	針の木岳大雪溪	L木村、笹平、吉田、渡辺、木南、松原、金沢 吉田(信)

.....[6 月]

6月 8日～6月9日	清津川サゴイ沢	L笹平、坂田
6月 8日	一ノ倉沢中央カンテ	L吉田、渡辺
6月 8日	那須白水沢左俣	L木村、笹平、鈴木、須賀、水島、松原、金沢
6月10日～6月11日	会津硫黄沢	L笹平、坂田
6月15日	奥多摩鷹ノ巣沢	L木村、笹平、吉田、渡辺、木南
6月22日	安達太良湯川	L木村、吉田、鈴木、須賀、木南水島、松原、 金沢
6月29日	三ツ峠岩トレ	L本図、木村、吉田、坂田、鈴木、須賀、木南 名雪、金沢、

巻機山山スキー

2003.4.6

パーティー L 木村 一、吉田 仁、渡辺聡子、木南真紀子
名雪博二、松原丈夫（ACC-J 東京）

私にとってACC-J茨城に入会して2回目の山行でした。前回の会津駒ヶ岳初山スノボーであまりの苦しさ（登りに）にあやうく臨死体験をしそうになり、今度こそ魂抜けずに帰るぞと意気込んで行きました。ところが到着すると4月に関わらず雪まじりの雨が降っており、一抹の不安が・・・・。

朝になると重そうな雪になっていました。辺りの視界は真っ白で時折ちらっと山が見える感じ。今日は中止かな？と意気込んだ分だけ残念なようなほっとするような変な気分で待機していると、もち行くぞと用意しだしたのは見た目怖そうな名雪さんでした。（今は全然そんなこと思ってませーん。）清水のバス停から林道を進み米子沢を渡り小尾根上を進み井戸ノ壁の急斜面を登る。かなり登ったところで雪がまた強くなり下降を決定。うーん。登るのはからっきしだけど滑るのはどうにかなるんじゃないー雪積もったしとちょこっと思っていた私はぬるかった。

重いあまりにも雪が重い。傾斜のあるところはどうにかなってもフラット気味のところは立っても滑らない体重移動するとした方向にのめり込む。あーんもう降りられないかもしれないと何度も絶望しながらもどうにか半泣きで下降。全く滑れず転げまくっていた私を心配そうに見守ってくれた渡辺さんの

目と、壺足での登りにスキー担いで付き合ってくれた木村さんの足の裏（それしか見てないから）はもう心の中で何度手を合わせたことか。ありがたいっす。しみたっす。

スイスイと滑って行くみなさんに迷惑かけまくり、合わす顔がないと思いつつも今度こそはとハマッて行く自分を止められない思い出深い山行でした。

（木南 記）



知床岳〜ルシャ山

2003.4.1〜4.2

パーティー L 笹平 孝

3月27日に飛行機で北海道へ向かった。中標津空港から羅臼までバスで移動する。3月下旬の羅臼は雪が多く残っており、海には広い範囲にわたって流氷が浮かんでいた。宅急便で送った荷物を受け取り、この近くにある知り合いの家にころがりこむ。夕方から雪が降り始め、明日は大雪の様だ。明日入山の予定だが、山に入れそうもない。夜になると、北海道のプロカメラマンが加わり三人で酒を飲んで過ごす。

3月28日 朝起きると雪がかなり積もっていて、早朝から庭の雪かきをして汗だくになった。今日は、カメラマンと一緒に無料露天風呂の熊の湯に行ったり、去年お世話になった民宿に行つて、いろいろ食べさせてもらいまたお世話になる。

3月29日 今朝も庭の雪かきから始まる。かるく1時間はかかるのでけっこうキツイ。相変わらず天気が悪いが、雪のほうは峠を越えたみたいだ。大雪で道路が通行止めになり荷物が届かないので、昼に仕事から帰ってきたこの人と一緒に羅臼キャンプ場に行つて雪の状態を見に行つた。ワカンだと膝まで潜つてとても大変だった。やはり山スキーの方が楽である。大雪のため相泊方面は通行止めが続いていて、天気が回復してもしばらく知床岳へは行けそうもない。

3月30日 今日は二人で近くの羅臼スキー場で遊ぶ事にする。数日前に営業が終了しているのでラッセルして登って行く。疲れるので2本

しか滑らなかつた。ここでビールを飲んでいると、地元の若い人が来て、ここでスノーモービルで遊ぶことになった。30分後、2台のスノーモービルが到着し、みんなでスキー場内を乗り回して遊んだ。エンジンは600ccで、ほんの数秒後には時速100キロで走るからすごい。

3月31日 今日は、カメラマンとそのモデルの人が合流し、四人で知床横断道路の途中までスノーハイクに行くことになった。羅臼キャンプ場前にあるゲートから出発して、2時間程歩いた羅臼岳が良く望める所まで行つた。知床横断道路の除雪はもう始まってい、4月中旬には開通予定だ。帰つてくると今日、相泊方面の通行止めが解除になったことを知り、確認のため相泊まで行つてみた。これでやっと明日から知床岳に行ける。

4月1日 早朝のまだ暗い中、相泊まで車に乗せてもらう。薄明るくなった頃出発した。海岸沿いは雪が多く残り、つぼ足だと歩き難い。すぐにスキーに変えて歩き始めた。30分ほど海岸を歩いた所で、間違えてカモイウンベ川の手前から取り付いてしまう。

1時間くらい歩いた所で、右方向にカモイウンベ川を確認したので苦労して正しいルートに戻つた。緩やかな登りが続き、スキーで順調に進める。カモイウンベ川の二俣を過ぎた所で川の間にある尾根を尾根通しに登って行く。600m地点辺りから傾斜が急になり、スキーを外してアイゼンを付ける。この先には40度くらいの急雪壁が150m程続いている。締まった雪に

バイルを叩き込んで、慎重に登って行く。ここを過ぎると傾斜は落ち着き、雪の上にはハイマツが顔を出している。広い稜線上では風が強く、ザックが傾いてしまう。ハイマツが無くなった所で、再びスキーに切り替えて行く。先にはP1159が見え、北に向かうと広い斜面出でる。

P1182付近から知床岳に向けて北東へ進んだ。ひと登りすると頂上のある稜線に上がり、ここにスキーやザックを置いて頂上へ向かった。

10分歩いた所で知床岳頂上に到着した。天気も良くて眺めも最高。

オホーツク海は流氷で埋め尽くされて真っ白だ。太平洋も知床岬の方は流氷で埋め尽くされていた。頂上に赤布を立てて写真を撮ってから戻る。頂上直下からのスキーは雪の表面がカチンカチンなので怖い。

北海道に来る前、スキーのエッジを研いだのに、エッジが効かない。ゆっくり滑り降りることにする。

P1182付近から来たルートと別れ、稜線上を南下する。P1062から先は、ハイマツが出ていてスキーでは下れなかった。急な斜面を降りると、カモイウンベ川のコルに着いた。一段上がった所でテントを張る。ハイマツが邪魔で上手く張れないが、なんとか横になれそう。オホーツク海に沈む夕日は綺麗だった。

4月1日 出発する頃になると、山の高い所にガスが掛かり始めた。まずは、P862とP859の中間のピークをめざす。先週のものか、所々に古いトレースが残っている。ピークからスキーで楽に下れる。次のピークを巻くと登りになり、シールを付けて行く。P786まで登ると、この先は長い下り斜面になる。このピーク付近はなだらかな傾斜で樹林帯になっ

ているので、しばらくは苦勞する。

P698を過ぎた辺りの尾根に出ると、この先は快適に滑ることができた。トッカリムイ岳手前のコルからは雪が重くなり滑り難くなったので、沢沿いを滑り降りる。途中から少し登り返してルサ乗越に着いた。この先のP382は北側をコルまで大きくトラバースし、P367の急な尾根を登る。

この先からなだらかな斜面が広がるので、磁石を見ながら進んで行く。ハイマツ地帯を過ぎ樹林帯の中を登って、ルシャ山手前のP700付近に出る。ルシャ山の登りは一面にハイマツの頭が出ていて、ハイマツにもシールが良く効くのでその上をスキーで行く。ルシャ山頂上は雪でのつぺりとしていた。頂上からは南東に延びる尾根を下って行く。ハイマツが薄くなった所でスキーに切り替える。樹林帯の中をキキリベツ川寄りに尾根を滑り降りた。標高を下げるとモナカ雪になり、まったく曲がることが出来ない。途中で悪いトラバースもあった。

P347手前のコルから先は滑りやすくなる。やがてショウジ川寄りに向きを変え、尾根の末端へ滑り降りる。最後は、崖を落ちるように降りると岩見橋バス停に着いた。最終バスは1時間前に行ってしまい、電話を借りようと歩いていたら、親切な人に車で送ってもらえて助かった。

4/1：相泊（5：00）-取り付き（5：30）-二俣（7：40）-急雪壁手前（9：40）-知床岳（12：50）-テン場（14：40）
4/2：テン場（6：50）-P786（8：30）-ルサ乗越（10：20）-ルシャ山（14：30）-南東尾根コル（16：20）-岩見橋（17：30）

（笹平 記）

羅臼岳山スキー

2003.4.10

パーティー L 笹平 孝

4月3日 知床岳に行った時にサングラスをしていなかった為、両目とも雪目になり、部屋を暗くして過ごす。

4月4日 左目がまだ痛い。部屋の中でサングラスをかけて過ごす。

4月5日 カメラマンが来たのでサングラスをかけて二人で出かける。久しぶりに外に出た。展望台に羅臼岳の撮影をした後、相泊に海の中の生き物探しへ行く。回りにはたくさんの船がウニ漁をしている。お昼を過ぎると船はみんな帰っていったので、海の中を探し始めるが、浅い所ではまったく何も見つからなかった。タイツを着た密漁のおじさんに20個くらいもらって、その場で食べた。すごくうまい。

4月6日 知り合いの民宿に、東京から来た知床岳登山ツアーのお客が20人ほど来たので手伝いに行く。合間を見て熊の湯に行く。

4月7日 羅臼岳の偵察に行ってみる。キャンプ場からほぼ夏道沿いにスキーで第一の壁まで登って行く。トレースがないので最近だれも歩いてない。里見台までの登りが少し分かり難かった事と、第一の壁から先は夏道が使えない事が分かった。帰りは、来た尾根とは別の尾根をスキーで滑り降りた。

道路に出ると知床岳登山ツアーのお客が数人歩いている。声をかけると、朝方天気が悪く、相泊方面の道路が通行止めになったので行けなかったみたいだ。3時過ぎに民宿へ行き、手伝いをする。

4月8日 今日は天気が良くないので、カメラマンの個展を見に図書館へ行った。午後から近場を散策する。

4月9日 羅臼岳は明日に決め、今日は自転車を借りて羅臼町を走り回る。

4月10日 羅臼キャンプ場まで車で送ってもらい、スキーで登り始める。数日前に偵察していたので何の不安も無く里見台まで行けた。この先のピークを越えると広い尾根に変わる。ここで夏道と分かれ、登山川沿いに進んで行く。あまり沢に下りすぎると崖になるので注意する。

支尾根をいくつか越えて、雪で埋まった沢に降りた。やはり沢通しは楽に登れていい。やがて泊場では、地熱で雪が解けて部分的に砂利が出ていた。ここまで来ると正面に羅臼岳が良く見える。

沢と沢の間の尾根を登って上の大地に上がり、緩やかな傾斜になる。屏風岩から夏道と分かれ、上の広い斜面を登る。傾斜が急なので、スキーを外してアイゼンに変えて行く。

稜線に近づくと強風でなかなか進めない。突風が吹くたびに耐風姿勢でこらえながら上を目指す。頂上直下の岩清水にスキーとザックをデポして頂上へ向かう。出だしが急になっているので、帰りのルートを見失わないよう赤布を立てながら登って行く。

風は強いが、突風はなくなったようだ。結構悪い最後の5メートルを

越えると頂上に着いた。天気がいいので360度のパノラマで、国後島は夏よりも近くに見える。よく見ると国後島の奥の海も見えた。知床横断道路の除雪作業も、あと少しの様だ。

慎重に岩清水へ戻り、スキーで下り始めた。カリカリなのでエッジは効かず、スピードがすぐ出てしまう。発達した特大のシュカブラ地帯を過ぎ、風があまり当たらなくなると新雪が1センチくらい積もった広く急な斜面になる。

ここまでくればこっちの物で、快適なターンをしながら滑り降りる。この斜面が標高差400メートル以上あり、コケると止まらないのでバイルを常に持って滑る。15分以下の緩やかな斜面まで降りられた。この先も気持ちいいくらい楽に滑り降りて行く。泊場から先の沢沿いは行ける所まで滑ってみる。

来る時に沢へ降りた地点から尾根を一つ越えた所まで滑れた。この先は雪溪が切れているので斜面を登り返して、トレースに合流する。途中からハイ松原の尾根まで少し登り、尾根沿いを里見台まで滑り降りる。

里見台からは雪が腐ってきたので苦労した。キャンプ場手前の沢に降り立つと、朝登る時には無かったヒグマの足跡があちこちにある。

今日、冬眠から目覚めた様だ。でもこの足跡は1頭ではなく、3頭くらい歩いた物だろう。笛を吹きながらひと歩きでキャンプ場に着いた。これで今回、二つの知床登山が無事に終わった。目の前にある熊の湯に入って、地元の漁師と魚の話をしながらのんびり1時間汗を流す。帰りは、ここから3キロの道程を歩いて家に戻った。

4月11日 民宿の人と一緒に、去年昆布漁でお世話になった漁師の所へ行った。丁度、船から網にかかった魚を外している最中で、スケソウダラ、マダラ、カレイ、カニその他いろんな魚が採れている。作業服を借りて、少し手伝う。スケソウダラ、マダラ、大きいタラバガニをいただいたて帰る。

4月12日 今日は、茨城に帰る最後に日となった。魚やカニを宅急便で送ったり荷物の整理で何かと忙しい。今まで泊めてさせてもらった知り合いの人に中標津空港まで車で送ってもらう。途中、有名な回転寿司に寄って食いまくる。その後、中標津空港で今年の秋にまた来る約束をして別れた。

4/10：羅臼キャンプ場（6：30）－里見台（7：30）－泊場（10：00）－岩清水（12：30）－羅臼岳（13：10）－泊場（14：40）－羅臼キャンプ場（16：30）

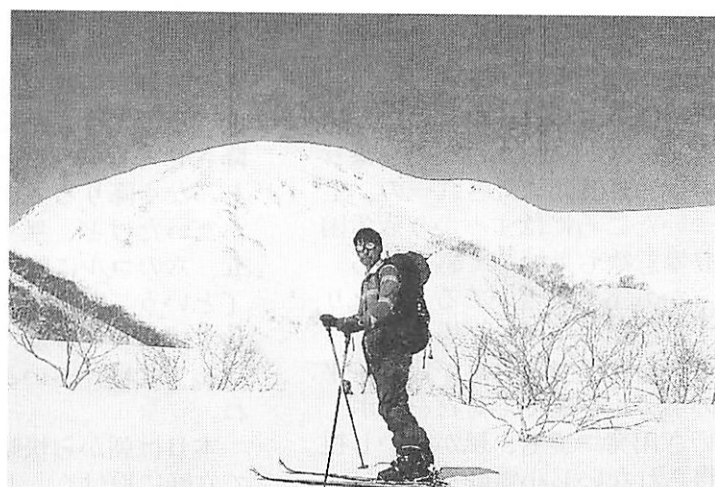
（笹平 記）





知床岳をバックに
笹平

羅臼岳をバックに
笹平



羅臼岳頂上にて
笹平

剣岳八ッ峰

2003.4.27~4.29

パーティー L 笹平 孝、渡辺聡子、名雪博二 (ACC-J東京)

GW後半が山スキーメインだった前半はやっぱ雪稜登攀でしょということでも八ッ峰に決定。

春日部で名雪さんと合流して室堂へ向った。雨は朝方には上がっていたけれど山のほうはガスがかかっていてひじょーにやな感じ。とりあえず出発の準備をしてトロリーバスに乗り込む。室堂までのチケットを買ったのは今回が初めてなのだが、噂通りよいお値段である。もう少し安くはないものであろうか。

出発時間が遅くなったせいか大勢の観光客のなかにもまれーの、乗り換えの度に長時間またされーの、室堂についたころにはすっかり疲労困憊、登攀意欲も半減って感じである、しかも室堂吹雪いてるし。とりあえず雷鳥沢のキャンプ場まで行き、GW後半までもる予定の笹平さんのホテルを建てて荷物をデポし、いざ出発。でも、風が強いし視界は得られないし小雪降ってるし。

うーん。踏み後をたどって剣御前の小屋まで登り、赤布を頼りに剣沢を降りる。沢の途中で風雨をしのげるすばらしい小屋を発見したので本日はここで終了とあいなった。

朝起きてみると、完全にホワイトアウト。ますますもってやな感じ。しばらく様子見をしてから出発するとちょうど長次郎谷の出合辺りまできた辺りでガスが晴れてきて青空が見えてきた。

希望としては八ッ峰の末端から取付きたかったのだが、時間的に無理ということも長次郎谷をつめ、一、二

の科尔から稜へあがることになった。

一、二峰間ルンゼは途中雪が切れかかっていたり、上部は傾斜がきつかったりしてちょっときつかったかな。前を行っていた先行さん達が二峰を越えるのに苦労してるのが見えたので、二峰の下をトラバースして二、三の科尔で稜線にでた。

このころには空はすっかり晴れたり最高展望、だけど暑かったなあ。三峰、四峰を通り五峰の懸垂のところで先行さんに追いつき先に下降させてもらうことにした。ここであぶなく降りる方向を間違えるところだったけど、無事に見覚えのある五、六の科尔に降り立った。本日終了ということで立派なホテルを建設しすばらしい夕焼けと満天の星空を拝んで就寝。さいこーのテン場だね。

本日は朝から快晴、荷物をデポして六峰に取付く。七峰、八峰では細いナイフエッジにドキドキしながら要所でロープをだしながらすすみ、八ッ峰の頭に無事到着。頭のところで大休止しながら振り返ると後続パーティーが続々とやってくる。こんなにいたのねって感じ。

さあ、あとは剣の頂上を踏むだけだ！ってことで池の谷乗越から剣の頂上へと向う。一カ所やたらに急な雪壁になってるところがあり、帰りは懸垂だなと思いながら登った。

乗越から一時間強だったかな、で剣の頂上を踏む。ケルンは当然雪の下、祠は下の方に見えていた。あの

時の劔岳は3000mあったに違いないと思う今日この頃である。ひとしきり頂上を満喫した後荷物をデポした五、六の科尔へと向う。長次郎谷左俣を熊の岩まで下降し、トラバースとちょっとした登りで難なく科尔に到着。荷物をまとめて下る。

2人はシリセードを多用しあつという間に滑り降りてしまった。ホテル建設地を長次郎谷出合付近に見つけ、本日も満天の星を眺めた。あ～

なんて贅沢なんでしょう。

さて、下山日である。明日は仕事が残っている我々は劔沢を下り、そのまま残る笹平さんは劔沢を登っていった。ハシゴ谷乗越への登りと最後のダムへの登りが毎度のことながらきつかったが順調に足を進めて午前中のうちに扇沢に戻ってきた。早い時間に戻ってきたので当然のように下っ走りて春日部までもどってきたのであった。

(渡辺 記)



八ツ峰5・6の科尔にて
渡辺、名雪

黒岩 聖人岩

2003.4.27

パーティー L 吉田 仁、鈴木 拓、小南真紀子。他3名

ジムでフリークライミングを昨年の11月に始めてから初のフリーの岩場体験。

ジムではみそっかすの私に登れるところはあるのかなと一抹の不安を抱えながらの参加。ジムの男の人たちはひよいひよいと簡単そうにヌンチャクをセットしてくれる。すんごいな。私にとって記念すべき初ルートは“おっとりマミちゃん”5・9。あら岩って堅いのねと思いながらもどうにか登れてしまう。続いて“風の子カンテ”5・10a あれあれと登れてしまう。まさかな～と続いて“梅ごのみ”5・10bさ

すがに登れませんでした。でもテンションかけながらも上までたどり着く。

めっちゃ気分よく帰ってきました。なんだか岩場独特のルールや見守ってくれる仲間の声がとても気持ちよくまたまたハマってしまいそうです。

それにしてもルートの名前って面白い。マミ落としたぜとかマミー撃とかって言葉にドキドキしながらいつかクールガイ落としたぜとか言ってみた～なんて思ってしまった。

(木南 記)

立山 真砂谷山スキー

2003.5.1

パーティー L 笹平 孝

昨日は、雨だったので一日中みくりが池温泉でのんびりしていた。雨は夜から雪に変わり、気温が-10度まで下がって寒くてほとんど寝れない。夜中の2時頃には起きだし、コンロで暖をとりながら朝を待った。朝方から天気が良くなり出発の準備をする。

新雪が積もりトレースが消えた山肌は綺麗だが、出発するのはもう少し様子を見てからにしよう。8時頃、トレースが付き始めたので出発する。出発時間が少し遅くなったのでハイペースで登って行く。

別山乗越まで1時間の目標だったが、10分オーバーした。別山のトラバースでは、雪がクラストした急斜面があり緊張する。真砂乗越からは後立山連峰が望め、新雪の積もった真砂沢カールはまだ誰も滑っていない。

真砂乗越からの滑り出しは崖の様な所が多く、傾斜が緩い所でもかなり急斜面だ。急斜面を何とか滑ると緩くなり、快適なパウダースノーを楽しむ。しだいに真砂沢は狭くな

り、上部からの雪崩が心配でまともに休憩できない。

高度を下げて行くと途中からザラメに変わり、デブリが目立つ。最後の頃になるとボコボコして滑り難くなる。滝の様な所を過ぎると剣沢の出合に着いた。

ここから別山乗越まで高度差1000mの登り返しがあるので、まだまだ気が抜けない。スキーにシールを付けて、黙々と剣沢を登り返す。長次郎谷出合には、三日前に作ったテン場のブロックがわずかに残っていて、ここでビール休憩にする。

岩壁に付いたツララがパラパラと絶え間なく落ちてくる。そしてまた、ひたすら剣沢を登り返す。剣山荘までは、誰もいない静かな登りとなった。別山乗越に戻り、ビールを買って景色を眺めながらのんびり休む。ここから雷鳥沢を滑り降り、テントへ戻った。

雷鳥沢テント場 (8:10) - 別山乗越
(9:20) - 真砂乗越 (10:50) - 剣沢
(11:40) - 別山乗越 (15:30) -
雷鳥沢テント場 (16:30)

(笹平 記)



立山雷鳥沢
笹平のマイホーム

立山 丸山中央山稜

2003.5.2

パーティー L 笹平 孝

今日は、天気がいいので丸山中央山稜へ行ってみる。

雷鳥沢テント場から小走谷を詰めると、内蔵助カールが目の前に広がる。とてもスケールが大きく綺麗な形のカールで、どこからでも滑り込めそうだ。大きなカールの中を滑るのは、開放感がありとても気持ちがいい。

途中から右寄りに滑り込み、夏道がある稜線の向こう側にある大きな一枚バーンの急斜面へ出る。荷物は軽いが、雪質が悪いので豪快には滑ることが出来なかった。

丸山中央山稜のコルへ向かって、トラバースを交えながら高度を下げて行く。丸山中央山稜に着くとスキーをザックに付け、ラッセルをしながら登り始める。

強い日差しと高い気温で半袖になっても暑くてしょうがない。登り始めてから1時間もたたないうちにビール休憩にはいる。しばらく休み体温が下がった所で登り始めた。急な雪壁になり、けっこうハイマツが多いので枝を掴んで行ける。急雪壁を登り小ピークをいくつか過ぎると、雪が付いていない岩稜に変わる。

枯れたハイマツを頼りに登り、ハイマツの中をトラバースして行くと、P2279を過ぎた辺りのなだらかな稜線に出た。やがて、富士の折立の登りは岩稜になり、傾斜が急になってくる。スキーの板が邪魔でガリガリ岩にあたる。そのまま岩稜を行くか右側の急なルンゼを行くか迷う。

ルンゼの方が早そうなので、岩稜を左に回り込むように登る。

雪は硬い所が多く、前爪だけしか入らない。再び岩稜に上がると、富士の折立直下の岩場が目の前に見える。ハーケンがたくさん打ってあり高さが10メートルもないので、行ってみようか考えたが今回は一人なので止めておく。

左側の急斜面をトラバースして岩場を回り込み、富士の折立の頂上へ這い上がる。展望が良く、とても気分がいい。そして、10年ぶりに雄山神社へ寄ってみる。

上空には県警のヘリが巡回していて、撮影なのかやたら近くを飛んでいた。帰りは、社務所の裏からスキーで降りられるのがうれしい。ボーダーが数人たまっていたので、滑り出しの場所がすぐに分かった。

上部は急斜面でガリガリのアイスバーン状態が続き、思い切って前傾姿勢にしないとエッジが食い込まない。やがて、緩やかになった辺りから一ノ越方面へトラバースして登山道に合流した。

室道まで滑り込んで、みくりが池温泉に寄って行く。ゆっくり温泉に浸かり、雷鳥沢テント場へ戻った。

雷鳥沢テント場 (6:00) - 内蔵助カール (7:50) - 丸山中央山稜のコル (8:30) - P2279 (12:00) - 富士の折立 (13:20) - 雄山 (14:40) - みくりが池温泉 (15:30)

(笹平 記)

竜王岳東尾根

2003.5.4

パーティー L 本図一統、渡辺聡子、松原丈夫 (ACC-J東京)

「竜王岳東尾根に行こうと思うんだけどー」と言い出したら、渡辺さんが「いいですよー」と快く応じてくれた。お世辞にも魅力あるとはいえないこのルートにだ。

渡辺さんに声をかけたのは、こんなルートに付き合ってくれるのは、彼女くらいしかいないだろうという思いもあったからだ。が、快い返事にとても嬉しかった。渡辺さんに感謝したい。

今回の春山山行は、山スキーを主体とした登山だが、私にはまだ膝に自信がなく、と言ってもただのピークハントでは物足りなく、このルートを思いついた。前日になって松原氏も行くと言ってきたので、結局3人でのアタックとなった。

一ノ越へのアプローチは杖を2本使いゆっくりと登る。痛みがあり「やはり無理かな」と思いつつ。なんでこんな思いをしながら山に登るんだろう。こんなことを考えながら十一年が過ぎてしまったが...

一ノ越から見る東尾根はとても格好良いが、一番の弱点を登ったらロープも必要なさそうで、できるだけ面白いような所を登らねばつまらない。そういう意味でのルートファインディングはちょっと考えるルートである。

トラバースして適当な所から取り付く。岩を選んで2ピッチ伸ばす。リードはもちろん渡辺さんである。彼女はアイゼン登攀も上手くなったなと思う。ガリガリというアイゼンが岩に擦れる音は(あまりいい音ではないが)心地よく、今自分が登っていることが実感できて私は好きである。所どころに残置ハーケンもあるので登る人はいるようである。高度感もそれなりあるので、初心者にはアイゼン登攀の良イト

レーニングになると感じられた。わざわざここを登りに来るほどの価値はないと思うが、時間潰しに半日楽しむのにはいいかも知れない。頂上で休憩する。雄山に登る人は多いが、ここに来る人は少なくて静かな山頂だ。

一ノ越に降りる途中、行き会った人に「とても格好良かったですよー」と言われ、バカにされているようでちょっと恥ずかしかくも思った。

渡辺さんは、立山を縦走してからテントに戻るということで一ノ越で別れた。松原氏はというと、スキーを履いて颯爽と行ってしまった。残された私は一人でトボトボと降りて行く。下りは登りよりも痛くて、他の人から見ると「なんであんな格好してまで山に来るの?」と思われるだろう自分の姿を感じながら。元気よく楽しそうにおしゃべりしながら歩いている人たちが羨ましい。こうして自分でケガしてみると、健康のありがたさが身にしみて分かる。

すると後ろから「もとすー」と呼ぶ声が聞こえた。みると水島さんだった(水島さんは昔から、私を呼ぶのに「もとず」ではなく「もとす」なのだ)。雄山の頂上まで行って来られたとのこと。「びっこひいているのですぐに分かったよ、大丈夫か?」とお言葉。ひときり雪の上に座り込んで話をした。昔、水島さんと屏風の雲稜ルートを登ったときのことを思い出す。あのときは下りで水島さんが雪に足をとられ、膝を捻ってしまい、私が付き添って降りたのに今日は逆の立場である。

今日は完全に渡辺さん頼りの登攀だった。これまでは誰と登るときも、相棒が

のぼれなかったら「いつでもリードは代わってやるぞ」という気持ちで登ってきたのになさけない。この原稿を書いている今、ある雑誌が届いた。見てみるとケニア山の登攀記録があった。普通、ケニア山に登ったといってもレナナ峰のこと。この記録はネリオン峰の登攀だった。最高峰はバティアン峰で、ネリオンとバティアンは岩登りをしなければ頂上に

は立てない。このようにまだまだ登りたい山がたくさん待っているのだ。はやく治さねばと思う反面、もうダメかもという弱気もあることは事実である。いやイヤン！ネバーギブアップの精神で頑張らねば！

(本図 記)

剣沢～雷鳥沢山スキー

2003.5.4

パーティー L 木村 一、笹平 孝、吉田 仁、木南真紀子、
江平尚志、佐藤（無所属）

5月2日、福岡から午後便で富山空港へ向かう。空港に降りると、立山連峰が迫る様にその勇姿を見せてくれた。今日中に室堂まで上がってもよかったのだが、ケーブルカーの始発駅のある立山町に宿を予約していたので、バスと電鉄を乗り継いで立山へ向かう。車窓からは、剣岳も望めた。

25年ぶりだろうか、実に美しい峰だ。途中、地元の高校生達が乗っては降り、また別の高校の子らが乗ってくる。車窓からの風景が25年前と変わらないのとは対照的に、車内の学生達の容姿には驚きっぱなしの山スキー屋2年生の江平君でした。

駅に降り立つと登山者は2～3名で、ほんとに連休の立山かと不思議に思いながら宿へと向かう。宿にも宿泊客は私と大阪からの1名のみ、しかし、宿のおかーさんの指示で翌朝のケーブルカーの予約をしに、再度駅へ行く。

5月3日朝、宿を出ようとしていたら携帯がなる。大町側の関東組の御一同様からの連絡だった。ここで初めて、中島氏も急遽参加した旨を知り去年の富士山以来の再会に気持ちがはやる。

宿のおかーさんをお願いして、ピッケルと帰りの衣類等をデポさせて戴く。立山駅に着いて、びっくり。電鉄と観光バスとマイカーでやってきた人・人・ヒト…。昨日の予約が無ければ、2時間待ちであるが、時間指定のケーブルカーで予約用の改札からホームへチョコ食おう、いや、直行。

美女平からバスに乗り換え、室堂で御一行様を待つ。ターミナルの屋上から雷鳥平方面への出口だ。久々に触れる雪の感触を楽しんでいたら、懐かしい面々がやってきた。ハグハグをする。水島会長、金沢氏、初めてお会いする目黒の松原氏、そして、あの名雪氏と茨城メンバー。

初めて会う会員もいるが、会報やネットの写真で顔や性格まで事前情報は入っている。それと完璧に一致したのは、渡辺嬢だった。

雷鳥平にテント設営後、『大走り沢』にスキーとボードのトレに行く（ノンベアの長老組を残して）。登りながら見える景色は最高の絶景であるが、読者の皆様にこの景観を伝える術を持たない私としましては、ある事件をお伝え

しようと思います。テント設営が終わった後、さあ、同居メンバーの発表です。女性2名(若い)は朝食の準備があるため『食当と同じテント』に本図会長の猛半パンツ、いや、猛反発。明日の出発時間・云々、背中を揉んで欲しい・云々。の、へ理屈をこねて2人の美女をゲット、しかも寝る場所まで指定。しかし、この成り行きに驚いているのは私一人だけ。どーやら毎度の事で、これもM図会長の権限らしい。博多の山やでは、これを『Y崎幹事長』現象と呼ぶようです。

『大走り』の雪がきれる末端から、皆、思い思いにテン場に向かって滑り込みます。スキー組は尾根を、ボード組は沢を。尾根組は、中腹から左へ折れテン場へショートカット、かなりの急斜面です。テレではこんな急斜面を滑降していない私は、内心ビビリまくりです。

フォールラインに入ると身体が落ちる感覚でした。途中立ち止まり上を見上げると、菊池シェフが上からすっ飛んできます。ターンの度にスキー板の裏が全部見えた気がした程です。

ゲレンデの斜度とは比べ物にならないほど怖さを感じた初日でした。結局、ビリでフィニッシュです。結構凹んでいたのですが、まだ明るい内からの夕食の宴のビール・焼酎ですっかり凸モードに復帰し、久々の再会に話題がはずみ、菊池シェフと水島会長の例の逸話にまた凹む江平テレでした。

5月4日、雷鳥沢をあがり御前小屋

経由で剣沢を滑降。

テン場から多少のクレバスを越え長い長い尾根を登るが、メンバーの間隔がかなり開く。スキー組はアイゼン、ボード組はソフトブーツ用アイゼン?、スノーシューと各々の好みのスタイルで決めている。それにしても、J I N氏のスノーシューは快適そう。他のメンバーのアイテムの使い方も良い勉強になる、・・ふむふむ。

剣沢の左の急な斜面を選びながら、そこに板を落とし込みテレターンを決め奇声を挙げながら剣沢を滑降し、平蔵谷の出会い手前で真砂沢滑降のN雪氏と合流。10分から15分ほどのあつと言う間の快樂の時間の後に待つのは、あの苦しい登り返しです。それが、苦になるどころか楽しく感じるのは雄大な景観のなせる術でしょう。

ジムのサウナで見る本図会長の裸マトレッチとは大違いです。(実はまだ見ていないので、今度一度お願いします)

御前小屋で剣沢メンバー全員+真砂沢1名が終結したのちに、ガレ場を少し下って雷鳥平のテン場へ滑降。雪質はザラメで快適、しかし、下部でコケタとの事。

後で聞いた話だが、御山へ直登・滑降組の菊池シェフは、ピーク直下で大滑落で九死に一生状態だったらしい。滑落のちょっこつと前に貸してもらったピッケルのお陰で助かったとの事。私のピッケルは、現在宿のロッカーの中。

(江平 記)

立山雄山

2003.5.4

パーティー L 中島 淳、菊地光夫、金沢 清 (ACC-J東京)

今年の5月の連休は会のまとまりがよく総勢14名の大所帯になり大変賑やかだった。

茨城からは総勢7人で行きドライバーは適当に変わりながら高速をマッハで飛ばしていく。扇沢で東京のメンバーと落ち合い、テントで酒盛り翌朝トロリーバスに乗り込みケーブルカー、ロープウェーと乗り継ぎ室堂に着く。

ここで、福岡からわざわざ再会のためにスキーを担いで有休を取って山に来た江平氏との再会で水島氏や本図氏は25年ぶりになるのではないかなと思う。

今日の幕営地は雷鳥沢までなので重い荷物も苦にならず1週間ほど前から山に来ている笹平氏と落ち合いこれで今回のメンバーが全員が揃った。

当日は、天気もよくベースキャンプを設置後10人位で真砂岳へ登り、頂上直下よりテントに向けて直下降で滑り降りるなかなか楽しいものだ。ベースには水場もあり、快適な岳人の楽園であった。

翌日は竜王岳パーティー・雷鳥沢パーティー・雄山パーティー各自それぞれが登りたい山にトライ。

我々は中島氏、金沢氏と3人でテント場からまっすぐにのびている尾根すじの隣の所を登る。

最初は緩やかな登りだったのだが上部のあたりは急に傾斜が増し、途中何度か足が止まり足場が不安定でピッケル、アイゼンなしで登ってきてしまった事を後悔。

スキーのストック2本では靴を氷にうまく蹴り込めず登山靴のサイドのこぼの部分を使い登るが、氷が硬く頂上直下のところでたちどまってしまった。

上部にいた金沢氏がすぐピッケルを手渡ししてくれ、足場を踏み固めていた最中にバランスを崩し滑落してしまった。約50m位滑落したが命綱のピッケルを貸してもらっていたので事なきを得た。金沢氏に感謝!!感謝!!

停止した場所より今度はスキーに履き替え雄大な雪面を欲しいままに滑る。天気は良好で申し分なく雪質もよく最高のコンディションであった、金沢さんピッケルどうもありがとう御座いました。命の恩人です。

せっかくアイゼン、ピッケルをベースまで持ってきているのに甘く見て持っていかなかった自分が悪かったと反省しきりである。

早くテントに帰って来たので仲間を待ち3時頃より夕飯をかねてビールで乾杯する。

楽しい合宿のひとつときである。翌日はタンボ沢をスキー組とボード組で滑降する。黒部の雪質は非常によく滑っていても気持ちのいいもんだなと感心する。

(菊地 記)

立山タンボ沢山スキー

2003.5.4

パーティー L 木村 一、中島 淳、渡辺聡子、笹平 孝、吉田 仁、
木南真紀子、江平尚志

5月5日、今日は父と母の結婚記念日。思えば、このバカ息子は、親の結婚記念日を祝ってやった事なんか一度も無い。山はやめたはずだったが、木村氏の誘惑についで乗ってしまったばかりに今日もこうして山に居て、両親の記念日の事すら思い出しもせず、タンボ沢ってどんなところ？。

御一同様全員で、室堂へ向かう。皆、ビールの空き缶やアルコールの空き瓶を山ほど持ったの撤収である。室堂で、タンボ沢組とロープウェイ組に分かれる。水島会長とはここで『永遠の別れ』をする。しかし、この元氣ぶりでは10年後の穂高冬合宿での再会もありかも。

一の越で休憩を取り、東一の越への長〜いスキートラバース。雪が切れ、ブッシュ帯に入る処がちょっと悪い。上部のブッシュ帯にいる別パーティーの落とす落石に中島氏がバラギ弁で怒鳴る。そんなやり取りのモナカに、いや、最中にK南さんが落っこちた。でも、無事でなによりでした。

結局、正規ルートはもっと下だった事が判り無事に東一の越へ到着。先行の2パーティーが、休憩していた。ここからタンボ沢への滑り込みは実に怖かった。先行パーティーの1組は3人ともテレだったので、彼らの出だしをみて参考にしたかったのだが・・・。

日本サバイバル連盟、雪上サンダル愛好会の中島氏のドロップインに続き、本図代表の隠居後も立派に会を盛り上げてくれる若きバラギ軍団が飛び込んで行く。しぶしぶと、斜滑降気味に

江平テレが落ち込む斜面は40度との事。もっとある様に感じるが、これが経験の差だろう。『見てエロ！、いや、見ている！オジサンだってこんな斜面、平気バイ！』と、3ターン目でコケタ。でも、斜面に立っている。あまりにも急斜面なので、ちょっと山側に腰が引けた途端に身体半分が雪面に引っ掛った感じだった。山側の腕をちょっと伸ばす程度の仕草で簡単に身体が立ってくる。まるで、起き上がりこぼしだ。

この時期の雪はザラメだから、まっすぐに切った滑りが良い様に感じた。板を振りすぎると抵抗が多過ぎて、かえって安定を失ってしまう。

洗濯板みたいな(若いヒトには判るのかな？、洗濯板って)雪原のタンボ平の中のヘソの辺りで小休止してロープウェイの駅へ滑り込む。駅から一部始終をスコープで見ていた本図会長と菊地シェフのSAJの級別審査もどきの各人の滑りの評価を聞き流しながら、ビールをあおり今年最後のシュプールを振りかえる見る最終日でした。

黒部へ下るバラギ軍団の肩にはズッシリと重いリュック。それに比べ、ロープウェイで室堂に戻る江平テレの背中には、ピアノ教室用の手下げバック(中身は現金ウン百万円と非常食だけ)。いや、重いなのなんのって！。バラギ軍団の皆さん、すんません。

あの重い荷物でタンボ沢を滑った皆さんに敬意を表しながら、室堂にてビールを飲みノミして雪の立山連峰に別れを告げ、さらに3本目のビールを

飲み干して名雪氏モードで美女平行きのバスに乗り込みました。でも、常識あるワタクシは、バスの中では決して暴れる事も無く、無事富山市で一泊して6日の午後帰福の途に就いた次第です。

では、ニッポンの皆さん、サヨナラ、サヨナラ。

(江平 記)



剣沢に滑り込む吉田



黒部タンボ沢にて一休み 江平、笹平、木南、渡辺、吉田

尾瀬燧ヶ岳

2003.5.11

パーティー L 木村 一、吉田 仁、木南真紀子

毎年恒例の富士山頂上からの滑降を期待して集合場所に集まったが、富士山方面は天気が良くないので比較的天候悪化が遅い東北方面と言う事で尾瀬燧ヶ岳に変更になった。

良く考えて見ると燧ヶ岳も毎年滑っているのだから恒例になっている場所だ。

メンバーは毎週でも雪上を滑りたい吉田君と木南さんと私の3名で茨城を出発した。

御池の駐車場で恒例の小宴会後仮眠。翌朝は5:30起床、6:00出発。最初の急斜面の登高後小休止、雪原と化した熊沢田代を横断して岳樺の粗林の急斜面を登高時に背負っていたスキーの板がザックから外れて雪の斜面を滑り出してしまった。アレ。アレと言う間にはるか下の岳樺の根本の穴に突っ込んで止まったので一安心。ザックに自作で取付けたスキーホルダーの具合が悪くなく、登高時の振動で自然に外れたのが原因らしい。応急処置で何とかスキーをザックに取付けて再び登高開始。

急斜面を登り切ると広沢田代の雪原に出るが今年は雪解けが早く木道の一部が露出している。頂上付近の斜面には既に滑り始めたスキーヤーの姿が見られる。我々も1時間後にはあそこを滑っている姿を思い浮かべながら辛い登高を続けると、やがて頂上につながる雪の急斜面の下に出た。ここからは一步一步雪を踏みしめて登るとやがて頂上の一隅に飛び出したが、ここも雪が少なく頂上にはブッシュを掻き分

けて立つ始末だ。

9:20頂上着。頂上からは360度の展望が楽しめる。まだ真っ白な尾瀬沼。穏やかな斜面の平ヶ岳。2ヶ月前に木南さんが始めて雪山に登った会津駒ヶ岳。

頂上直下の雪の斜面で大休止後、板にワックスを塗り滑降開始。ザラメ雪にテレマークターンが面白いように決まり快適な滑降だ。下から登ってくる一団に『格好いいね』と煽てられ気分を良くして一気に広沢田代まで滑ってしまった。

ボード組の吉田君、木南さんも快適に格好してくるがここ広沢田代からは若干ののぼりが入るので、ボードを脱いで抱えて登高している。燧ヶ岳で下降時に登りの行程が入るのが唯一ここである。ここを登りきると岳樺の中の急斜面が待っているが頂上雪面に次ぐ快適な斜面である。ここを一気に飛ばし、スピードに乗って熊沢田代の雪原に飛び出し木陰で小休止。更に針葉樹林の中を滑り短い急斜面を滑り降りると御池の駐車場に到着。11:30駐車場着。

今回も楽しんで頂けましたか吉田君、木南さん。来年は必ず富士山に行きましょう!!

(木村 記)

御岩山岩トレ

2003.5.11

パーティー L 本図一統、笹平 孝、坂田英希、須賀泰司

林道をテクテクと歩き、山道をサクサク行くと、御岩山山頂です。

とは言え、山菜を教えてもらったり、キノコを摘んだりしながらなので、新人の私などはテクテク、サクサクしながらさらに「ふむふむ」「なるほど」と思いながら歩くのでした。

山頂は以外と平凡なところで、ハイカーや岩トレ面々の休憩場所となっています。

その一角にある大きな岩の上が山頂なのですが、その岩の上で山頂は何処かしらと辺りを見まわす淑女がとても印象的でした。

そうそう、私達は岩登りトレーニングです。山頂を僅かに下るとゲレンデがあります。

この度は本図御大監修、笹平さん指導によるアルパインスタイル初級です。早速、支点の作り方、ビレイの取り方など教わります。

なるほどなるほど。目からウロコの技

術ばかりです。

さあ、まずは登ってみましょうということでリッジをまずはセカンドで、次にリードでランニングビレイを取りながら行きます。

次にマルチピッチの練習です。

須賀さんとザイルを組んでコールを掛け合いながら登ります。

特にザイル捌きを意識します。

お昼を挟んで、プルージックによる自己脱出の練習をします。

これがなかなか慣れると楽しく快適でズイズイ登ってしまいます。

最後に先ほどよりずいぶん立った岩をリード、懸垂下降で本日の打止としました。

やはり、岩はいいなあ。おもしろいなあ。満足の日でした。

それとともにご指導いただいた本図さん、笹平さんに深く感謝です。

(坂田 記)



芝倉沢を滑降中の 吉田

谷川岳芝倉沢山スキー

2003.5.18

パーティー L 木村 一、吉田 仁、渡辺聡子

今シーズンは山スキーに何回行っただろうか。一シーズン2, 3本で満足かなという私ではあるが、木村さんの「芝倉沢行こう、快適だから」という声にちょっと重くなりかけた腰をあけていつものように車に乗り込んだ。

谷川の立体駐車場についてみるとかすかに霧雨がふっている。天気予報では晴れだと言っていたのに、全く谷川の天気は気まぐれだ。朝には止んでいることを祈りつつ就寝するが、朝起きてみると周囲はガスが立ちこめていた。とりあえず行こうということで朝イチのロープウェイに乗り込む。

天神平スキー場は今日で最後だということで大勢のスキーヤーがいるかと思っていたが、この天気のせいかスキー場は人气が全くなく殺伐としている。

視界があまり得られなかったがとりあえず谷川岳を目指して天神尾根を歩く。尾根はずいぶん雪解けが進んでおり、大部分夏道がでていた。私は冬の天神尾根しか歩いたことがなかったので、登山道の木道や、尾根上の避難小屋を初めて目にし、冬にはあの大きな避難小屋がすっかり隠れるくらいの雪が積もることに驚きを新たにした。

今年改築されるという工事中の肩の小屋のそばを通り、谷川岳の頂上に着く。頂上好きのわたしはとりあえず頂上にタッチしてそのまま一の倉岳へと向かった。稜線の雪はすっかり消え失せており、ほんとにスキーで滑り降りることができるのかと不安になるくらいだった。

このころから空が明るくなってきて

時折視界も得られるようになってきており、一の倉岳についた頃にはすっかり空は晴れわたり、360度の絶景を楽しむことができた。そのまま一の倉岳を通り過ぎ（とりあえずの頂上タッチは忘れなかったが・・・）

芝倉岳との鞍部に向かい、滑降開始地点で滑降準備をしつつ大休止。天神尾根や稜線のあまりの雪のなさに「ほんとに雪は残ってるんでしょうね？」と心配しきりだったが、芝倉沢はこの鞍部からはずーっと雪の斜面が続いていた。一安心である。

無風快晴に近い天気の中、滑降開始。木村さんが先頭をきって滑り出す。続いて吉田さん。私は出だしの急斜面にちょっと躊躇しつつ滑り出したが実際に滑ってみるとさほどでもなかった。稜線から終了点までわずか20分、ほぼノンストップで滑り降りた。

スキーを脱いでからの林道歩きは目をきよろきよろさせながら、タラの芽、コシアブラを採りながら一の倉沢出合まで歩き、一休みの後コンクリートの道路を立体駐車場まで戻った。

時期がちょっと遅かったので小石がごろごろしていたのと、デブリの跡がちょっと滑りにくかったのだが、全般的にこの沢はさいこーに快適な斜面で、私はひさびさに会心の滑りができ、非常に満足だった。「行こう」と言ってくれた木村さんに感謝！

（渡辺 記）

針ノ木岳大雪渓山スキー

2003.5.25

パーティー L 木村 一、笹平 孝、吉田 仁、渡辺聡子、木南真紀子
松原丈夫、吉田信一、金沢 清 (ACC-J東京)

先週の芝倉沢で満足したりなかったのか「針ノ木大雪渓を滑って今シーズンの山スキーを終えよう」ということになり、扇沢へ車を走らせた。扇沢で東京と合流して駅のひさしの下で大宴会（あたしは先に寝ちゃったけど）。

翌朝は快晴の中針ノ木岳へと向う。しばらく歩いて小休止にすると待てどころせど吉田信さんが現れない。どうしちゃったんだろうか？とみんないろいろ心配するけど、最終的には「きっと道間違えたんだよ。いいよ、行っちゃまおうぜ、後からくるって」である。いいのかそれで・・・と思いつつみんなの後に続く。

朝から太陽が照りつける中、汗だくになりながら足を進めて途中数回休憩を入れながらようやく稜線まで登るとすばらしい展望が迎えてくれた。ここから針ノ木岳の頂上まではあとわずかである。

笹平さん以外は板と荷物をデポして頂上へと向った。今週も頂上からは

360度のすばらしい展望が開けており、しばしの間みんなGWに登ったところ、滑り降りたルート、滑る予定だったルート等々に花を咲かせた。

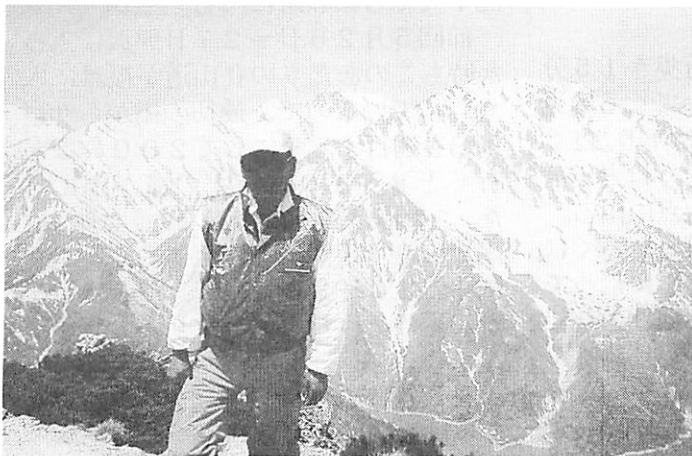
さて、と荷物をデポしたところまで戻り、それぞれスキーやボードをはき滑り始める。金沢さんはなんと稜線からシリセードである。遠目には滑落しているとしか見えなかったのだが・・・

（ごめんなさい）。

そして未だ吉田信さんとは合流できずである。それぞれが思うままのラインを滑り、途中で合流しつつ滑り降りていく。半分くらい滑り降りたあたりでようやく吉田信さんと合流。やはり道を間違えてしまっていたらしい。

めでたくみんな合流でき、そろって滑り降りる。滑走面がなめらかではないのでとても滑りにくい。先週とは雲泥の差だ。板で滑られるところまで行き、後は例によって例のごとく山菜を探しながら駐車場へと向った。今回はごみ、ふきのとうであった。

(渡辺 記)



針ノ木岳頂上にて 木村

清津川サゴイ沢

2003.6.8～6.9

パーティー L、名雪博二、仲川敏幸

6月7日（金）

21:00 森林公園駅集合、中川と待ち合わせて吾が愛車スバルサンバー赤帽仕様を駆って一路、関越高速は東松山インターから月夜野インターを目指す。この区間高速料金は2,050円。

軽自動車は安いのだ！

しかし、赤城の坂道では60km/hしか速度が上がらない登坂車線で走るが右側を大型トラックが唸りを上げてあつという間に追い越して行く、これはすごく怖い。岩登りより怖い。せこい軽トラックだともうこういうスリルも味わえるんだぜ。いいだろう。

けれど三国峠ではけっこう走る、清津川の林道終点で入山祝いにいっぱいやって早々に寝る。

翌日までに車が2台ぐらい来ていたが、ここのところ釣りで棒沢へはここから入る人は殆ど居なくなった。今は殆どがカツサダム経由で、棒沢の下部の核心部をカットして入るルートが釣師のノーマルルートになり、又入りやすくなったため魚も殆ど釣れなくなった。そして赤湯登山道から釣師は消えていき非常に静かになった。

6月8日（土）

明るくなる頃出発、林道歩き15分＋急登30分汗が噴き出してくる頃見返りの松に到着。ここからは下り。良くもこんなに下るものかと思うほど下ってサゴイ沢と清津川の合流点に出る。

第一鉄橋でサゴイ沢を渡る。直ぐに第二鉄橋で清津川を渡り右岸に沿っていくと露天女風呂がある。何回も此処を通って居るがだだの一度だけ婆さんが二人で入っていて、『あらいやだ、みられちゃったわねー』なんてぬかしや

がって『冗談じゃーねー、こっちだってそんなしわくちゃぶらさがりほしぶどうつきなんか見たくもねーんだ！』と思わず急ぎ足で通り抜けたよ。間違っても女子大生、女子高生の、あつ槍見温泉のぷっちんぷりんには、絶対にお目にかかれませんか。槍見温泉のような極楽はもう一生無いまま死んで行くんですねー本図さん。はじめちゃん。

この風呂のすぐ傍にほこらがあって、巨大な木で出来たオチンチンが祭られている。その隣に木の股が、丁度人間の大きさに腰に赤い布を巻き付けて見えなくしてある。この布をちよっとめくり上げると、この木の股に穴が開いていて、女性器にそっくりで、此処を通るたんびにめくっては拝んでいくのが習慣になっている。賽銭箱に5円入れて、合掌、「祓いたまい、清めたまえ、神ながら、守り賜い、幸わえたまえ」2礼、2拍手、1礼。

赤湯温泉を通り越して300mほど行くと第三鉄橋があり、左岸に渡り返し、ここから清津川とサゴイ沢の間の尾根を乗っ越すとさつき渡ったサゴイ沢の上流1kmぐらいの所に出る。

前回5月26日～27日熊沢に入った時もこのあたりの登山道が複雑に入りくんでいるので、最初の橋からサゴイ沢を遡行する事にして200mほど行くと8～10mほどの滝が出てきた。この滝は直登は出来ない、右側（左岸）は全く手が出ない全体的にかぶり気味の20～30mの壁、左側は何とか高巻けそうだが、かなりの大高巻になりそうだ。

見ただけで、引き返すことになった、やっぱり登山道どうり行くのが正解だ

ろう。行けば何とかなるだろうが可成り時間が掛かりそうだ。

赤湯を経由して、サゴイ沢に出て、ここで川虫取り。川虫の一匹は大岩魚の一匹に匹敵するのでこれをおざなりには出来ない。おかず、なしになってしまう。

暫く行くと五重滝が現れる下二段を左岸の岩を登り左トラバースして越えると二俣に出る。右俣が熊の沢で、後三段の滝が目の前に落ちている。ここでサントリーオールドの500^{ミリリットル}を拾うまだ三分の二以上入っている。これは幸先がいい。

左俣に入るとサゴイ沢だ、200^{メートル}行くと最初の滝8^{メートル}が出てくる。此処も左岸を大きく高巻いてやせ尾根からかなり急斜面を灌木に捕まってやっと滝上に降りる。100^{メートル}ほど行った小さな河原にフライを張り、釣り道具とザイルを持って出掛ける。300^{メートル}ほど遡行すると、たいして高い滝ではないがゴルジュが始まりどうにも登れそうにない左岸は絶望的に見える。右岸の高巻きだろう。ガイドにも右岸から巻くと書いてあるがこれが可成り悪く、バイルを出して何とかごまかしで登る。ここから先は難しいところはなく12時30分まで進む、釣りはそこそこ釣れるが、小型だ、しかし、ウド、コゴミ、ウルイ少々、コシアブラ、タラノメ少々、でザックが大分重くなってきたので下ることにする。目の前に最後の15^{メートル}滝が見える。

登りでやばい思いをしたゴルジュの高巻きを下るのにとうとう2回の懸垂をする羽目になった。此処は登りもヤバイが下りは可成りヤバイ、気をつけよう。

ホテルフライに還って薪を集め、早速岩魚の刺身でイッパイ、良く火が燃えて気持ちが良い、こちら辺からあま

り記憶が無い。夜、星が出ていたのか、雨か、曇りかさだかではない。

6月9日(日)

朝目が覚めると、未だ頭がぼーっとしていて食欲がない。少しウイスキーを飲む、持ってきたウイスキー300ccと拾ったウイスキー約300ccとビール4本、焼酎300ccが、ウイスキーを100ccを残すのみとなっている。こんなに飲んだのは誰だろう？不思議。

岩魚の焼き枯らしが良い色になっている。ウド、コゴミがずっしりと重い、ウルイが旨そう。で、パッキングして背負うとびっくり、来た時よりも遙かに重い。果たして自分はこんな重いザックを背負って2日酔いの体で無事に下界にたどり着くのであろうか、不安になる。すぐ下の8^{メートル}滝の高巻きへの登り返しが土の急斜面でやばい、バイルを出してステップを切りながら進む、何とかクリアー。

下りは慎重に時間を掛けてくだる。やがて苗場山への昌次新道へ出る。此処で足を洗って、鮎タビと靴下をよく絞っておく。こうすると歩っていてぐちゃぐちゃしないし、2時間も歩けば徐々に乾いてくる。沢登り鮎タビ族にはおすすめです。

帰りは湯宿温泉で暖まって200円、(僅か200円を払わずに入るやつが居るちゃんと払おう)温泉からちょっと先にどさん子ラーメンがある。10年以上振りで、どさん子ラーメンの味噌ラーメン600円を喰ったが、昔のまんまの味で、懐かしく、旨く、よかったー。むらたも良いがここも旨い。渋川まで下っ走り。渋川から関越高速で藤岡で降りる700円。安い、ここからはまた下っ走りで一路我が家を目指すのでありました。目出度し目出度し。

(名雪 記)

谷川岳一ノ倉沢中央カンテ

2003.6.8

パーティー L 吉田 仁、渡辺聡子

Opening

みなさん、聞いて下さい。
みなさん、聞いて下さい。
本物のrock climberは起立して下さい
繰り返します。本物のrock climberは
起立して下さい。
困ったことになりそうですね。
みんな俺たちを見てびっくりしてるぜ
床に顎が届きそうなくらい口をあぐり
開けてびっくりしてる。
なんだってみんな同じとこ登ってんだ
よ、他にもたくさんあんだろ。
あまり俺を待たせんよ、糞したく
なっちゃうぜ、けつの穴がヒクヒクし
てる、Hey bitchその指で栓してくれ
よ。
恐るべし男が変チにいるぜ。ちょっと
まで、そんなはずない、冗談だろ、俺
の聞き間違いだろ？
そしてDreは言った、、、。
何も言ってねえよ、このバカども、
Dreは死んだんだ、俺の地下室に閉じ
込められてるんだ。
HA HA
chicka chicka chicka fat shady
ヤツを見てみろよ、xxxxを掴んで歩き
回り、観光客を怒らせてる。
それでもやつはすごくキュートだぜ
Yeah、俺の頭のねじはちょっと緩んじ
まってるに違いない。
でもお前の両親のベットルームでお
こってることよりも醜いことを俺は
知ってるのさ。
山に登って思いっきりクレイジーな行
動をとりたいと思うことが有っても俺
にはできないんだ。

yuji hirayamaは死んだヘラジカとXXX
してるがな。

my bum is on your lips (俺のケツは
おまえの唇の上)

ラッキーだったら、お前は俺のケツに
キスしてくれるかもしれねえな。

これが俺たちがこれからのclimberに
届けるメッセージ。

俺たちはただのほ乳動物。

まあ、落石起こして人の頭をスイカみ
たいに割っちゃうような人種もいるが
な。

もし死んだ動物とxxxしてもいいって
いうなら、さらに気持ち良くなるもの
を俺は持ってるぜ。

女性陣、ストッキングを振ってコーラ
スを歌ってくれよ、こんな感じだ。

Chorus

俺はfat shady。

そうさ本物のfat shadyだ

他のfat shadyは俺の真似してるだけ
さ。

それでは本物のrock climberは起立し
て下さい、起立して下さい、お願いし
ます。

あの割れ目にぶち込んであるものはな
んだい？こんなタンポンの紐みたいな
ものに体重掛けろってか。

とたんにすっぽ抜けて血まみれさ。

キャメの3番でも突っ込んでけよbitch
俺は遠足気分のxxxxxには懲り懲り、
やつらは俺をイライラさせるだけ、だ
から俺たちはお前らをぶつつぶすため
に送り込まれたんだ。

俺みたいなヤツは100万人という
ぜ。

俺みたいに罵って俺みたいに何も構いやしないヤツら。

俺みたいな態度、行動をする奴らは山のようにいるんだ、このスピードで進んでいったら40になる頃には治療所で看護婦をナンパして奴らのケツを狙ってる。

唯一の男になりそうだ、どんなヤツにもfat shadyは宿ってるんだ、本物のfat shadyは起立してくれよ。

そして中指を立ててくれ、頭が行かれてぶち切れっていることを誇りに思う

んだ。

さあもう一度、最大限に大きな声でコーラスを歌ってくれよ
Chorus

俺はfat shady。

そうさ本物のfat shadyだ。

他のfat shadyは俺の真似してるだけさ。

それでは本物のrock climberは起立して下さい。起立して下さい。お願いします。

(吉田 記)



那須白水沢左俣2段30mの滝を登る 鈴木、須賀



会津硫黄沢を遡行中の坂田

那須白水沢左俣

2003.6.8

パーティー L 木村 一、笹平 孝、鈴木 拓、須賀泰司、
水島幸男、松原丈夫、金沢 清 (ACC-J東京)

初めての沢登りである。前の週末に、溪流シューズ、ソックス、スパッツを買い込み、この日を楽しみに待っていた。

前夜20時谷田部のつくば市役所に茨城組は集合した。東京組は現地集合予定である。

下道で走ること約3時間半、現地に着いた。そのころから雨が降り始めた。早速テントを張って小宴会の後、2時頃雨音を聞きながら就寝した。

翌朝は7時起床。雨はやんでいたが曇っていた。8時出発。遡行の歩き出しではおっかなびっくりだったが、徐々に慣れてきて、まもなく歩き自体を楽しめるようになった。

溪流シューズの濡れた石の上でのグリップ力には驚いた。登り始めた頃から天気は快晴となり、暑いぐらいになった。そんな中で、沢の水は少しも冷たく感じず、とても心地よかった。

沢登り自体では特に困難なところはなかったが、2カ所ロープで確保されて登ったところはあった。2カ所目を登り切ったときに、この先にもう一カ所ロープが必要となる所があると聞いて、どんなところだろうと期待しながら登ったが、結局それは2段に分かれていて、それと気付かず登ってしまった。多少のスリルを期待していたので、少し残念だった。

沢のつめは約30分の藪こぎだった。沢の中の涼しさはすぐに吹っ飛び、ひたすら汗をかいて前進した。登山道にでたときは、ほっとした。ちょうど12時だった。

藪の中は蒸し暑かったので、尾根を通り抜ける風がとても気持ちよかった。甲子山、朝日岳を眺めつつ昼食をとり、甲子山からの一般道で下山。駐車場には2時半頃に着いた。

その後、登山口にある温泉(大黒屋)につかった。温泉は女湯と秘湯に分かれていて、秘湯が男湯として使われているようだった。ただ、文字通り解釈すれば、秘湯には女性も入ることが出来るはずである。事実、メンバーの誰かが、その昔、外人の女性が入ってきたことがあると話していた。ちなみにこの話は今回の山行中、3回くらい聞いた。まあ印象深い出来事だったのだろう。

ところで、温泉に入る際、ちょっとしたことが起こった。このちょっとしたことは後で聞いてみると、当会では結構頻繁に行われていることらしかった。この「ちょっとしたこと」について詳しく書くことは出来ないが、家に帰ってから嫁にその「ちょっとしたこと」について話したら、嫁は「そんな犯罪集団すぐに脱退すべきだ」と激怒したことを書き添えておく。

温泉でさっぱりした後、やはり下道を走り、つくばには19時半に着いた。沢登りが初めての自分は、夏の暑い盛りでも尾根道を汗だくで登ることしか知らなかったのも、今日の気持ちよさに沢登りに開眼した思いだった。

(鈴木 記)

会津硫黄沢

2003.6.10～6.11

パーティー L 笹平 孝、坂田英希

心配していた天気も上々、晴れ渡る青空のもと七入を出発。目指すは実川・硫黄沢。

沢はもちろん、釣りあり山菜あり、夜は焚火、上部には湿原と、とてもゼイタクな計画なのであります。

日帰りも可能ですが、そこを一泊にするというところが楽しみを倍化してくれているはずです。

平日休の生業の私に合わせて計画をしていただいた笹平隊長には感謝、感謝なのです。

てくてくと林道を歩いていくと堰堤の見える沢があります。

そこが硫黄沢。標柱もあるので見紛うことはありません。

エンヤと堰堤の右を越え、対岸の広々した河原で遡行準備に取りかかります。しばらくは気持ちの良い沢歩きとなりますが、程なくゴルジュ帯となると中小の滝が出てきます。

おおむねヘツリと水流の脇を登って行くことが出来ます。

一転、明るく開けた場所に出ると、饅頭か鏡餅かと思わせるナメ滝が。

この気持ちの良い場所でのんびり休憩といたいところですが、下腹部に緊迫感を感じていた私はキジ場を探しに藪の中へと消えて行くのであります。

ココからだんだん滝の落差もゲンと高くなり、高巻きを交えながら越えて行くのですが、沢の瑞々しい風に癒されながらの遡行はピーカンの尾根歩きでは到底得られない快感なのであります。

2段滝上段10mは唯一ロープを出す

登りです。

笹平隊長、坂田の順に超えると、さあそこから”おさかな釣り”と相成ります。

しかし、こんな滝の数々を越えてやってくるおさかなは偉いなあと関心しきりでしたが、古き山人たちの放流から上部にも生息しているのではないかという笹平隊長の説に納得。

昔の山人も偉いなあと唸るのでした。

さて、釣りです。

スレてない岩魚が続々と……。なんてネット情報に胸躍らせながらMyテンカラ竿をスラリと取り出すまではカッコ良かった（と思う）。

しかし、しかしです。

優雅に、しなやかに振り出すはずの毛鉤は繁みに掛かり、水面に着ける事すらままなりません。

かくなる上はと、笹平隊長に教えてもらうことにするのです。

ということで、仕掛けから餌まで、何から何までお世話になります。

程なく、隊長は続けざまに岩魚を上げます。

おお、すごいぞ。続け続けと思えども、私の穂先には何の手応えもないのでした。

なんとなく沈滞ムードのなか、何か確信めいたヒラメキが！

あのポイントかなあ。

あきらめかけた頃の一匹。うれしいのうれしくないのって。やっぱりうれしいのでございます。

結局、坂田はこの一匹だけでしたが、隊長がたくさん釣り上げてくださいましたので、今夜の宴は焚き火を囲んで

の豪華なディナーとなるはずです。

それはそれは夢のようなディナーでございました。

笹平シェフ直伝の料理法も教わり、あとは実践あるのみ。

ってその前に釣りの修行です。

翌朝も何とか青空がのぞき、なんとか持ってくれそう。

謹製・岩魚ラーメンを頂き、撤収です。

この後、流れは平凡となり、ジャブジャブと気持ちよく足を濡らしながら歩いて行きます。

最後に大きな釜のハングした滝は左から巻きます。沢床へ戻ると水量はグッと減り、沢幅も心持ち狭くなります。うねうねと蛇行する流れを遡ると名前の由来なのでしょう、沢底が赤茶け、硫黄臭がするところがありました。ほどなく、笹平隊長が小さな湿原を見つけます。

水芭蕉がイイ感じです。

さらに藪を漕いで行くと今度は大きな湿原を発見。

思わず笑みがこぼれる瞬間です。

ココにはもちろん木道はありません。

ふかふかの湿原をそのまま歩いてしまいます。

見る人が見たならば「自然環境保護」を強く訴えられることでしょう。

でも、そのまま歩いてしまうんだもんねー。へへへ。

と浮かれていると沼山峠へのバスの音。あれれ、バスから丸見えです。

わあ、まずいまずい。山岳誌に告発されちゃうよー。

蜘蛛の子を散らすが如く逃げ惑う隊列。藪の濃くなってきた沢へと逃げ込むのでした。

車道まで一投足となったところで今度は山菜採りに興じます。

笹平隊長に「コシアブラ」のレクチャー

を受けてその色形をインプット。

しかししかし、なかなか見つからないものです。

さびしくて悲しくて。思わず涙がこぼれないように上を向いて歩いて行くと、ありましたありました。

見紛う事無き「コシアブラ」チャンです。すかさずロックオン。

コツが分かれば面白いように見つけれれる事から山菜採りの手が入っていないのが伺えます。

食べきれないほどと思えるコシアブラをザックに仕舞いこんだら大した藪を漕ぐ事無く車道に出ます。

沼山峠は尾瀬へのハイカーでごったがえしています。

バスから降りた人々が続々と尾瀬への登山道へと消えて行くのです。

そんなことに目もくれず我隊はそれに背を向けて七人へと進みます。

山菜を見つけながらコロコロとトって行くと見覚えのある硫黄沢出合です。

一言に山といっても一言で語ることは難しいものです。

山へ行けばいろんな楽しみが待っています。

仲間と行けばなおさら、この山旅も同様です。

山はイケナイね。クセになるものね。ハッキリ言って罪ですな。

また一步、深い深い山の懐へと入り込んでしまったようでございます。

(坂田 記)

奥多摩鷹ノ巣谷

2003.6.15

パーティー L 木村 一、笹平 孝、吉田 仁、渡辺聡子、
木南真紀子

今回は山菜の採れる沢に行こうと言う事になり、天候もあまり良くないので奥多摩の鷹巣谷に決まった。メンバーは山菜大好きな渡辺、笹平、に吉田、木南、山に行ったらお土産を持って帰らないとお仕置きが待っている木村の5名で雨が降りしきる中奥多摩の日原を目指して一路車を走らせた。

中日原のバス停近くの町営駐車場に車を止めて恒例の宴会後就寝。翌朝目が覚めると雨は止んでいたが、今にも泣き出しそうな空模様なので手早く朝飯を食べ鷹巣谷に向かった。

鷹巣谷の入口には天幕が設営されていましたが、身支度をしながら天幕の方を見ると、あ！。あ！。なんとカップルが抱合っているではないか。なんと大胆な事に、あーこれ以上は出版禁止用語に抵触するので書けません。うらやましい。

雨まで降ってきてこれから薄暗い谷の中に入るのが嫌になってしまうが、ここまで来てやる事が無いので仕様がなく鷹巣谷に入っていった。入渓するとすぐにワサビ田の跡が現れてきて続いて地蔵滝が出てくるが、スリッパに注意して難なくクリア。多少はワサビを期待していたが残念ながら1本も残っていないのでガッカリ。

途中休憩するが朝の9時頃にも関わらず夕方6時頃の薄暗さである。やっぱり雨の中の沢登りはパッとしない感じがする。更に幾つかの滝を越すと20mの大滝が目の前にドーンと出てきたが

右壁が簡単に登れそうだ。

渡辺さんがトップでザイルを伸ばし、木南さんがザイルを結び後続するが他のメンバーは思い思いに勝手に登ってしまった。大滝の上部で水ノ戸沢を詰めるか金左小屋窪を詰めるか迷うが、結局水ノ戸沢に入ってしまったが、ここにもワサビは1本も残っていなかった。

稜線への詰めは最後は笹薮のヤブ漕ぎが若干あったが、簡単に稲村岩尾根の登山道に飛び出した。鷹ノ巣山方面はガスが濃く掛かっていたので小休止後速やかに下山開始。稲村岩を巻き再び鷹ノ巣谷出合いに戻ると例のカップルの天幕はまだ撤収されずに残っているではないか。雨も朝より強くなっているので天幕の中でイチャついているらしいが、ここまで来てやらなくてもと変に感心してしまう。

今回はお土産を得る事が出来ずお仕置きが待っていると思うと足取りも重く、足を引き摺るようにして車に戻り後続を待っていると、笹平君と渡辺さんがニコニコしながら帰ってきた。更に木南さんまで獲物をゲットしたらしく満面の笑みを浮かべて帰ってきた。木村家の家庭の事情を話すと3人は快く獲物を分けてくれたので感謝々。

(木村 記)

安達太良湯川

2003.6.22

パーティー L 木村 一、菊地光夫、吉田 仁、鈴木 拓、木南真紀子
水島幸男、松原丈夫、金沢 清 (ACC-J東京)

初夏も近づき沢登りの季節到来、今回は東京のメンバーも4人参加して、総勢9人です。

入梅時なので天気の方がいまいち心配であったが、今日行く沢は沢沿いに登山道が通っており、いつでもエスケープ可能との事、塩沢スキー場の空き地より歩き始めて、少し行くと右側に沢が見え足場のよさそうな所より入渓。

この沢は初心者向きで簡単な沢である。ノーザイルで行くことができるので、吉田君がトップで年齢が高い人は後ろになる。ゴーロがかなり続くが、大きな釜を持った5メートルの滝が現れると様相は一変し次から次へと滝や美しいナメが現れ飽きることが無い。

左手にガレを見て、その先大きな滝をかける支沢を過ぎると、本沢の核心部のひとつ、三段滝へと到着する。若手&木村さんは滝を直登するが、我々はノーザイルで巻道を登る事にした。

更に小滝をこえていくと左手に岩壁を見ながら美しいナメ床が続く。ここでは東京の金沢さんがウオータースライダーで楽しんでいた。

更に遡行すると二俣となり、そこで登山道が横切る。右俣の出合には幅広の美しい八幡滝が掛かっている。ここからは、延々とナメとナメ滝が続く、やがて豪快な霧降滝25メートルが現れる。

この辺で遡行を打ち切り、二俣まで戻りソーメンで昼食にする事にした。

ナメ床を下降するので非常に気を使うが、ちょっとした所で水島名誉会長がスリップして尻餅をついてしまっ

た。見た目にはたいしたこと無いスリップにみえたのだが、ダメージが大きく非常に痛み、二俣でみんながソーメンをたべていたが、ここで休んだら動けなくなると言い、登山道を下りて行った。

長年山を登っていると仲間に迷惑をかけられないとの考えだろうと思われる。駐車場に無事到着し近くの温泉に入り登山は終了。

水島名誉会長は2,3日は我慢していたようだがとても痛く病院に行ってみるとなんと骨折とのことで即入院。

病院に見舞いに行ってみると、いや入院は退屈で退屈でとこぼしていたが、まんざらでもなさそうだった。看護婦が若い娘なので、体を洗ってもらうのが気持ちいいとの事。

この元気があればまだまだ山登れますよ水島さん。

(菊地 記)



安達太良湯川にて 素麺で昼食

三ツ峠岩トレ

2003.6.29

パーティー L 本図一統、木村 一、吉田 仁、鈴木 拓、木南真紀子
坂田英希、須賀泰司、名雪博二、金沢 清 (ACC-J東京)

いつものように前夜8時半に谷田部出発。首都高は珍しくすいており、その日のうちに現地に着いた。直ちに幕営し、小宴会の後に就寝。

翌朝は6時起床、7時出発。出発後1時間ほどで山頂に着いた。それから30分ほど下って取り付きに到着した。

着いてみると結構人がいっぱい居た。後で聞いたら都岳連の講習をやっていたらしい。須賀君がその中に知人を見つけたらしく挨拶をしていた。

ガチャを着けて、フラットソールを履いて準備完了。まずは吉田さんのトップで、須賀君と地藏ルートから登った。最初の最初が少しハング気味になっていて、ここで多に苦労し、2回ほど落ちてしまった。結局、そこはぬんちゃくを掴んで何とか乗り越えた。出だしがそんな感じだったので、その先が危ぶまれた(今考えてみると、三ツ峠では結局ここが一番難しく感じた)。

その後、第1クラックを経由して、都合2ピッチで天狗の踊り場に着いた。第1クラックから天狗の踊り場にかけては特別に難しく感じる箇所はなく、吉田さんは「こんなもんハイキングだ!」と言っていた。小休止の後に、みんなで大根下ろしフェースを2回登った。下から見上げたときには一体どうやって登るんだろうと思ったが、なんとか(でも一杯一杯)登れた。

懸垂で最初の登山道に下降した後、今度は名雪さんのトップでリーダーピッチ、クローワール、権兵衛チムニー

と登った。その後懸垂で登山道に降りてきたのが16時半くらいだった。帰りに温泉に入ろうという話だったが、残念ながら温泉はつぶれていた。仕方ないのでそのまま帰った

(つくば着22時半位)。

三ツ峠にはブヨだかアブだか分からないが、そんな感じの虫が一杯居た。刺してくる様子もないので無警戒にしていたが、実は刺されていたらしく、三ツ峠から帰ってきて次の日あたりから10カ所以上猛烈に痒くなってきた。この痒みは1週間程度続いた。ただ、他の人はこのようなことを言っていなかったのも、私だけに起こったことかも知れない。でも、今度同じ時期に三ツ峠に行く人は虫除け対策をすると良いかも知れない。

(鈴木 記)

《 友 好 山 岳 団 体 の 月 報 、 会 報 、 そ の 他 》

ありがとうございました

月報

- ◎Rohman NO.215 2003.5 B5 30P 浦和浪漫山岳会
2003年春山合宿・川内山塊、尾瀬・戸倉・大清水・三平峠・長蔵小屋、上権現堂山
・猫岩・唐松山・中子沢ほか ◎Rohman NO.216 2003.6 B5 20P 浦和浪漫山岳会
南会津・三岩岳・袖沢・中門岳・会津駒ヶ岳、三重泉沢、奥鬼怒・黒沢魚沢・黒沼田代
・黒岩山・鬼怒沼・日光 沢温泉、川内・大谷沢右俣・鍋倉山・日本平山、叶津川ほか
- ◎Rohman NO.217 2003.7 B5 21P 浦和浪漫山岳会
2003年08山菜山行・蒲生川真奈川周辺、五頭・三階滝沢、蔵王ハイキングほか
- ◎Rohman NO.218 2003.8 B5 46P 浦和浪漫山岳会
2003年春の集中・越後黒又川左岸流域・唐松山、奥秩父・大洞川井戸沢、榎谷、
栗ヶ岳、奥利根檜俣川、2003 年夏合宿・下田・川内・光来出沢・杉川源流ほか、
- ◎Rohman NO.219 2003.9 B5 18P 浦和浪漫山岳会
矢木沢川・芝倉沢・檜倉山、奥利根・刃物ヶ崎山、水長沢・平ガ岳ほか
- ◎わらじ NO.566 2003.5 B5 16P わらじの仲間
北アルプス鹿島槍ヶ岳での事故発生状況について、ほか
- ◎わらじ NO.567 2003.6 B5 10P わらじの仲間
上州武尊山、妙義・相馬岳北稜ほか
- ◎わらじ NO.568 2003.7 B5 18P わらじの仲間
川内・早出川六三郎沢、足尾・三重泉沢、春の集中・五十母川日倉沢ほか
- ◎わらじ NO.569 2003.8 B5 10P わらじの仲間
谷川・赤谷川金山沢ほか
- ◎わらじ NO.570 2003.9 B5 12P わらじの仲間
韓国の沢ほか
- ◎わらじ NO.571 2003.10 B5 20P わらじの仲間
秋の集中・川内山塊、黒谷川小幽沢大持場沢・会津朝日岳、尾瀬・至仏山、蒲生川
周辺ほか
- ◎さわぐるみ NO.8 2003.5 B5 26P グループ沢胡桃
ハヶ岳・ジョーゴ沢、奥多摩・真名井沢、惣角沢、栗駒・真湯・笹森小屋・産女川
・稀大ヶ原・桂沢林道、玉川 南沢、奥多摩・小坂志川湯湯ノ沢・キットウ谷沢左
俣、レスキュー訓練ほか
- ◎さわぐるみ NO.9 2003.6 B5 20P グループ沢胡桃
台高・宮川大和谷本谷、焼石谷、ロクロ谷、丹沢・キューハ沢、尾瀬・鳩待峠
・赤倉山、奥多摩・神戸川水ノ戸 沢ほか
- ◎さわぐるみ NO.10 2003.7 B5 24P グループ沢胡桃
那須・阿武隈川南沢、一里滝沢・ヨロイ沢、本谷、丹沢・葛葉川、湯西川栗山沢
・フリウギ沢、奥秩父・釜ノ沢 西俣右沢、奥多摩・日原川小川谷滝上谷ほか
- ◎さわぐるみ NO.11 2003.8 B5 26P グループ沢胡桃
奥多摩・一之瀬本流、丹波川周辺、二口・名取川二口鳴虫沢、虎毛・虎毛沢左俣
・春川西俣、保呂内沢西ノ股 本流ほか

- ◎さわぐるみ NO.12 2003.9 B5 36P グループ沢胡桃
北ア・黒部上ノ廊下、金木戸川双六谷〜赤木沢、谷川万太郎谷井戸小屋沢、
焼石・尿前沢フロ沢ほか
- ◎さわぐるみ NO.13 2003.10 B5 32P グループ沢胡桃
谷川・湯桧曾川白毛門沢、大倉沢、奥秩父竜喰谷、魚野川・仙ノ倉西ゼン、朝日・
根子川ソウカ沢、蔵王・北川小屋の沢、二口沢糸滝沢、奥秩父・笛吹川東沢
西のナメ沢、南会津・檜枝岐川上ノ沢〜大津岐川大沢岐沢、
安達太良・阿武隈川杉田川ほか
- ◎Next! NO.88 2003.4 B5 10P 山岳溪流釣り集団むげん
仲間の近況報告ほか
- ◎Next! NO.89 2003.5 B5 18P 山岳溪流釣り集団むげん
奥秩父・荒川糸滝川横ノ沢八百谷〜惣小屋谷ほか
- ◎Next! NO.91 2003.7 B5 10P 山岳溪流釣り集団むげん
黒谷川小手沢ほか
- ◎Next! NO.92 2003.8 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん
丹波川本流、黒部薬師沢ほか
- ◎とまのかぜ NO.126 2003.5 B5 18P 童人トマの風
虎毛・高松岳、上州武尊山、奥多摩・坊主谷、丹沢・四町四反ノ沢、
天覧山搬出訓練ほか
- ◎とまのかぜ NO.127 2003.6 B5 58P 童人トマの風
針ノ木岳マヤクボ沢、小出俣山〜組くら尾根〜谷川岳、頸城・空沢山、五竜岳G0稜、
薬師、黒部五郎岳、赤谷山〜劔岳、吉森・柴倉岳〜粒沢、奥利根・北ノ又川、
会津朝日岳〜丸山岳〜火奴尾根、丹沢・大岩沢、奥秩父・東沢大若沢〜大滑沢、
釜ノ沢、奥多摩・巳の戸谷、鷹ノ巣谷、大菩薩・大黒茂谷、虎毛・江合川仙北沢
〜役内川赤倉沢、月山、南会津・布沢川大滝沢〜鎌倉沢、内蔵助谷・小窓雪溪
スキー、奥多摩・北秋川シンナソー〜ヒヤマゴ沢、大雪・黒岳〜北鎮岳ほか
- ◎とまのかぜ NO.128 2003.7 B5 46P 童人トマの風
飯豊山スキー、甲子・大川男女川〜二俣川、南会津・布沢川〜大滝沢、安達太良・
湯川、船形山・長谷沢、奥日光・鬼怒川黒沢魚沢〜赤岩沢、上信越・元山川南
ゼン沢、大菩薩・滝子沢左俣、塗川荒砥沢、南会津・実川赤安沢トヤマ沢〜赤安
田代、足尾・柳沢川〜三林班沢、小田倉沢、丹沢・小川谷廊下、五頭・エノ倉沢、
大荒川本谷、エノ倉沢
左俣、エノ倉沢、安野川小倉沢ほか
- ◎とまのかぜ NO.129 2003.8 B5 44P 童人トマの風
上信越・四万川ブノウ沢、那須・阿武隈川白水沢、安達太良・石筵川、谷川・
荒沢、二口・大行沢〜カケス沢右俣、摺上・中津川大沢〜日陰沢、烏川・枯松沢右
俣〜中津川左俣、中津川右俣〜烏川滑谷沢、早出川中杉川、谷川・万太郎谷、
ナルミズ沢、奥利根・檜又川〜ススケ沢〜すすけ峰、万太郎谷井戸小屋沢ほか
- ◎とまのかぜ NO.130 2003.9 B5 80P 童人トマの風
南ア・易老沢左俣〜光岳、北ア・雲ノ平〜赤木沢、上信越・釜川、大菩薩・
小室川谷、御嶽山・鈴ヶ沢東股、万太郎・大ベタテ沢左俣、朝日・荒川角檜沢
上ノ沢、奥多摩・大群沢、水根沢、秋川ウルシケ沢、

奥利根・割沢～水 長沢文殊沢中ノ沢～大白沢アサユウ沢、朝日・東大島川
西ノ俣沢～三面川化穴沢～東沢、北ア・金木戸川小 倉谷、飯豊・頼母木川
上小俣沢、和賀・堀内沢マングノ沢天狗沢～部名垂沢、鳥海山、月山、丹沢・
四町四反の沢、虎毛・江合川杉ノ森沢、越後・北ノ又白沢、ナルミズ沢、
木曾・柿其川、丹沢・エビラ沢、朝日・ヌルマ タ沢大留柴倉沢、飯豊・内ノ
倉川大石谷沢～七滝沢、蔵王・馬見ヶ崎川八方沢、奥多摩・南秋川矢沢熊倉沢
右俣、笛吹川東沢ゴルジュほか

◎すずらん通信 NO.266 2003.5 B5 11P 鈴蘭山の会

谷川・雪上訓練、谷川・武能岳西尾根、金山～昼闇山、双六岳周辺と黒部源流、
北ア・扇沢～爺ヶ岳、頸城・笹ヶ峰～火打山～焼山～真川～笹ヶ峰ほか

◎すずらん通信 NO.267 2003.6 B5 6P 鈴蘭山の会

白馬岳大雪溪ほか

◎すずらん通信 NO.268 2003.7 B5 6P 鈴蘭山の会

那須・阿武隈川南沢、白水沢、奥秩父・金山沢&信州沢ほか

◎すずらん通信 NO.269 2003.8 B5 18P 鈴蘭山の会

丹沢・四町四反の沢、信越・清津川熊の沢、丹沢・沖ビリ沢～水の木沢、
谷川・大源太川鷺の首沢、朝日・荒川 東俣ほか

◎すずらん通信 NO.270 2003.9 B5 7P 鈴蘭山の会

谷川・白毛門沢、足尾・庚申川、南ア・扇沢、谷川・朝日岳周辺の沢ほか

◎すずらん通信 NO.271 2003.10 B5 16P 鈴蘭山の会

信越・釜川左俣、ナルミズ沢、湯桧曾川・抱返り沢、北岳バットレス、
谷川・銭入沢、虎毛・ワルイ沢～赤湯又 沢～虎毛沢、飯豊・頼母木川足ノ松沢
谷川・足拍子川ダイレクトスラブほか

◎溪游 NO122. 2003. 春 A4 14P 遡行同人溪游会

地獄谷、わさび谷地獄谷シェークスピア氷瀑群、釈迦が岳、氷ノ山、
木曾御嶽山ほか

◎溪游 NO123. 2003. 夏 A4 23P 遡行同人溪游会

鈴鹿・元越谷、北俣川本谷～池木屋山、北股川コウキ谷、北ア・梅池平～白馬乗鞍
～風吹大池、台高・迷岳東尾 根、大峰・前期川、釈迦岳、台高・奥ノ平谷ミネ
コシ谷～奥の右俣、南ア・櫛形山、スイストレッキングほか

会報

◎ADVENTURE forum NO.12 2003.7 A4 8P 植村記念財団

地球に挑戦(立松和平)ほか

◎事故報告書 2003.5 B5 128P わらじの仲間

今年4月6日、坂本信彦さんと村田幹さんが鹿島槍ヶ岳で雪崩遭難した。
その報告書。

◎追悼 2003.8 A5 304P わらじの仲間

前記のお二人の追悼号

◎奥利根・谷川連峰の沢 2003.7 A5 148P 岸智礼

豊野則夫さんの仲間である岸智礼さんが執筆。利根川本谷、小穂口沢、水長沢、

越後沢右俣、中俣、宝川ナ ルミズ沢、只見川恋の岐川、湯桧曾川本谷、
大倉沢、東黒沢、谷川ヒツゴー沢、赤谷川本谷、笹穴沢、渋沢、
小出俣川マチホド沢本谷、センノ沢、仙ノ倉沢西ゼン、東ゼン、万太郎谷本谷
などが紹介されている。

◎風や雲がおしえてくれたこと記録集 2003.3 A4 25P 植村記念財団
2002年10月29日、板橋区立文化会館で行われた講演会の記録集。

以上閲覧したい方は本図まで



編集後記

山に登って更に原稿を書くのはシンドイと思いますが、若い時に一途に情熱を傾けた記録です。いつか年老いた時に古い会報【R&V】を読み返しながら、当時の思い出を振り返って見るのも一興です。その時の為に心を鬼にして原稿の執筆依頼と督促をしますので、協力の程お願い致します。

東京ACC-Jの会員も奮って応募、投稿して下さい。

(変臭長)

印刷所：やさと印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団